

若手教師を中心とした学校改革

3年間の体系的な指導計画を策定し、生徒の自律的な学習意欲と進路意識を醸成

変革のステップ

背景と課題

- やりたいことへの挑戦をためらう生徒が多かった
- 年度によって学習指導や進路指導の目標や取り組みが異なり、生徒の学習意欲や進路意識を醸成するよい取り組みが引き継がれにくい傾向があった

実践内容

- **「コアスクール委員会」を設置** 静岡県教育委員会の学力向上事業の指定を受け、指導改善に意欲的な若手教師で構成された「コアスクール委員会」を設置。同委員会が学校改革を推進することに
- **「スパイラルアッププログラム」を策定中** 同委員会が3年間の学習指導や進路指導を体系化した「スパイラルアッププログラム」を策定し、活用するアセスメントや面談の時期を全学年で統一するなど、全校体制での指導改善を目指している
- **「探究プログラム」を策定** 生徒が広い視野から自分のやりたいことを見つけられるよう、同委員会が国際的な課題に向き合う「探究プログラム」を策定

成果と展望

- 学習意欲や進路意識を高める生徒が増え、自ら設定した目標の実現に向け、粘り強く取り組むようになった

PROFILE



校は「文武両道」の下、主体的に社会貢献を図る生徒を育成する。学力向上を目指し、学習指導を充実させるとともに、部活動にも力を入れており、弓道部やレスリング部などが全国大会への出場実績を持つ。

設立 1963 (昭和38) 年  
形態 全日制/普通科/共学  
生徒数 1学年約280人

2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、横浜国立大、静岡大、名古屋大、静岡県立大などに88人が合格。私立大は、東京理科大、明治大、立教大、立命館大などに延べ517人が合格。

住所 〒425-0086 静岡県焼津市小土157-1

電話 054-628-6000

Web site <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/yaizuchuo-h/home.nsf>

よい取り組みが引き継がれるよう、教師間の連携の強化を図る

静岡県立焼津中央高校は、2017年度から、より高い学習意欲と進路意識を持った生徒の育成を目指し、指導改善を推進している。

同校の生徒は真面目で素直であり、生活態度も落ち着いているが、「皆と同じでよい」といった意識が強く、やりたいことが見つかっていても、挑戦をためらう傾向が見られた。また、以前は年度ごとに学習指導や進路指導の目標や取り組みが異なり、生徒の学習意欲や進路意識を思うように醸成できない時期もあったという。そうした中、14年度入学生生の学年団では、生活指導を立て直しつつ、生徒一人ひとりに向き合うな

ど、きめ細かな指導を3年間継続した。すると、自己理解を深め、自分の学習や進路と主体的に向き合う生徒が増えていった。その成果は大学進学実績に表れ、17年度入試では、京都大学や大阪大学といった最難関国立大学の合格者数が過去最多になったと、小関直樹校長は語る。

「本道に進みたい道を探ったり、高い目標を設定して挑戦しようとしたりする意欲を育んだことが、大学進学実績に結びついたのだと思います。そうした取り組みを学校全体で継承し、発展させていきたいと考えました。また、『大学入学共通テスト』が始まるなど、制度が大きく変わる21年度入試への対応を全



**校長 小関直樹** おせき・なおき  
教職歴33年。同校に赴任して3年目。「生徒が自分に自信を持てるよう、達成感や成就感が得られる学校づくりに力を入れたい」



**教務主任・コアスクール委員 古谷桂吾** ふるや・けいこ  
教職歴19年。同校に赴任して4年目。「新しいことはやってみなければ分からない」という姿勢で、挑戦を続けていきたい」



**進路主任・コアスクール委員長 露木隆** つゆき・たかし  
教職歴13年。同校に赴任して8年目。「目の前の生徒とともに学び、ともに成長し続けたい」



**コアスクール委員(探究学習担当) 山梨達也** やまなし・たつや  
教職歴5年。同校に赴任して6年目。「自分で考えて行動できる社会人になれるよう、生徒を導くことができる教師でありたい」

校体制で推進していけるよう、教師間の連携を強めたいという思いもありました」

## 指導改善に意欲的な教師のアイデアが、学校を動かす

17年度には、静岡県教育委員会の「学力向上ネオアドバンス事業」の指定を受けるとともに、学校改革案を立案・実践する部署「ネオアドバンス委員会」を設置して、20〜30歳代の教師を委員とした。同事業は、18年度、「魅力ある学校づくり推進事業」における「学力向上コアカール」に改編されたが、同校は改めてその指定校となり、「ネオアドバンス委員会」も「コアカール委員会」と改称した。

「初めから全教師の合意形成を図るのは、現実的ではありません。まずは、指導改善に意欲的な若手教師が学年や教科の枠を超えて集まり、学校を動かして行ってほしいと考えました」(小関校長)

同委員会は、学習指導を中心に新しい取り組みのアイデアを出し、実現させていった。その1つが、生徒の大学入試への意識づけを強化する取り組みだ。例えば、2年次の3学期を「3年生ゼロ学期」とし、模擬試験の振り返りをさせたり、春季休業期間に苦手分野を克服できるように学習計画を立てさせたりした。また、3年生の1学期には、外部講師による近年のセンター試験の出題傾向などについての説明会を実施し、生徒に夏季休業期間からセンター試験本

番までの学習計画も立てさせることにした。そして、進捗状況を点検し、計画通りに学習できていない生徒には、その要因と改善策を考えさせる指導をするよう、3年部の教師に呼びかけている。

同委員会では、進路指導の改善も最重要課題として位置づけ、取り組みを工夫している。具体的には、1年生に向けた進路説明会では、全国の国公立大学や私立大学十数校の職員を講師として招き、自大学における研究の特色や設備などを紹介してもらっている。進路主任でコアカール委員会委員長の露木隆先生は話す。

「生徒には、偏差値や知名度ではなく、学びたい学問から大学を選んでほしいと思っています。そこで、説明会では、なるべく多くの大学を取り上げるよう心がけています。また、本校の卒業生に自分の大学生活の面白さや大変さなどを語ってもらった動画を紹介することもあります」

同委員会が実践を続ける中で、次第に指導改善に前向きに取り組む教師が増えていった。

「生徒の学習習慣を定期的に測るためにアセスメントを活用したり、生徒がさらなる高みを目指すよう励ましたりする教師が全学年で目立つようになりました。指導改善の必要性について、教師間での合意が進んだことの表れでしょう。そうした変化は、同委員会が積極的にアイデアを出し、動いたからこそ生じたのだと考えています」(小関校長)

## 目標設定と振り返りを徹底し、自ら学びに向かう生徒を育成

19年度、同委員会は、新たに2つの取り組みを始めた。

1つは、どの教師が担任をしても一定の水準で指導できるよう、3年間の学習指導や進路指導を体系化した「スパイラルアッププログラム」の策定だ。18年度から同委員会が中心となり、先進校の取り組みなどを参考にした試案を作成し、合議を重ねて形にしていた。具体的には、生徒の学力や学習習慣の定着度を定期的に測れるよう、1・2年次に2回ずつ、3年次に1回、「高校生のための学びの基礎診断」として「スタディーサポート」を実施。学年団・教科団が協働してその結果を分析し、指導に反映させていく。また、スタディーサポートや模擬試験、定期考査、文化祭や体育祭、進路講話といった学校行事全般にわたって、事前事後に「Classi」(※1)でアンケートを配信し、目標設定と振り返りを必ず行わせることにした(図1)。それには、生活の充実と学習への意欲喚起を結びつけようという大きなねらいがあった。

「自分で立てた目標であれば、生徒はその達成を目指し、計画的に行動します。思い通りの結果が得られれば、さらに頑張ろうという意欲につながります。また、結果が不満ならば、その要因を考え、取り組む方法を工夫するきっかけになるでしょう。アセスメント

や定期考査を軸に、学校生活のすべてを学びとして捉えさせ、生徒一人ひとりの意識を学習に向けさせたいと考えました」(露木先生)

生徒が学習計画を練り直す機会として面談を重視し、各学年で年4回設定。例えば、1・2年生の面談では、学習習慣の確立をどう図るのか、自分の強みや課題は何なのか、強みを伸ばしたり、課題を克服したりするために、今後どのように学習を進めていくのかなどについて、生徒にプレゼンテーションをさせることにし

図1 1年次での「Classi」のアンケート配信計画(抜粋)

項目	4月	5月	6月
①学習における特徴等	• 学びの基礎診断の振り返り	• 中間考査の目標・計画設定 • 中間考査の振り返り	
②行動の特徴等	• HRデーの振り返り	• 思春期セミナーの振り返り • 野球定期戦の応援の振り返り • 文化祭の目標設定等	• 文化祭の振り返り
③部活動、ボランティア活動等		• 環境美化活動の振り返り	
④取得資格、検定等			
⑤表彰・顕彰等の記録			
⑥その他	• 進路希望調査 • 二者面談事前アンケート • 二者面談の振り返り	• 学習実態調査	

何事についても自律的にPDCAサイクルを回せる生徒の育成を目指し、あらゆる教育活動を通して目標設定と振り返りをさせるべく、3年間を見通した「Classi」のアンケートの配信計画を練り上げた。項目は、新しい調査書で拡充されることが予定されている「指導上参考となる諸事項」の欄に対応させ、6つとした。

\*学校資料を基に編集部で作成。

た。生徒が面談で話したい内容を整理できるように、面談の1週間前には、前回の面談後の学習における成果と課題を振り返らせるアンケートを○Q2で配信している。低学年の面談では、生徒自身に考えさせることを大切にしている

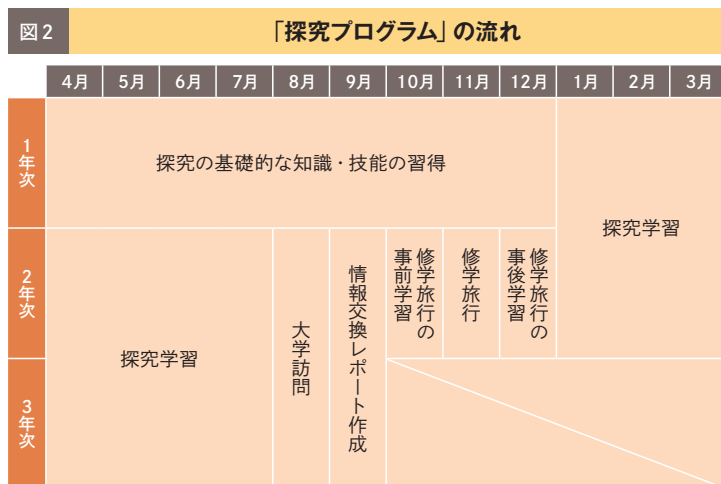
と、教務主任で、コアスクール委員の古谷桂吾先生は話す。

「教師が改善点を伝えるのは簡単ですが、そうした指導では、生徒は学習に主体的になりません。本校では、生徒が自分の強みや課題を分析し、学習のPDCAサイクルを回せるようになることを目指しています。そうなるまでには時間がかかるため、低学年からの意識づけが必要です。そのため、教師は面談で生徒が示した学習計画に課題を感じても、修正するよう指示するのではなく、その計画を立てた理由などを問いかけて、生徒が課題を自覚できるように促すことにしています」

今後は、定期考査やスタディーサポートなどの結果から、3年間でつけさせたい学力・学習習慣を明確にし、それを基に各学年における指導の到達目標を設定しようと計画だ。

「学年の到達目標を定めることで、教師は各学期の指導で何を指すのかも見えてきます。各学期の目標を達成できるよう、日々の指導に力を入れ、その成果を定期考査やアセスメントでしっかり測ろうとするでしょう。そうして、指導と評価の一体化を実現させていきたいと考えています」(露木先生)

\*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。



2年次のハワイへの修学旅行も「探究プログラム」の一環として位置づけ、日本との文化の違いなどと向き合わせる。  
\*学校資料を基に編集部で作成。

### 国際的な課題と向き合わせ、生徒の進路への視野を広げる

もう1つの取り組みは、生徒がSDGs（2）の目標を基にテーマを設定して行う「探究プログラム」の策定だ（図2）。19年度は1・2年次のみで行うが、20年度からは全学年での実施を予定していると、コアスクール委員の山梨達也先生は語る。

「SDGsの目標は日常生活とのかかわりが深いため、生徒は国際的な課題を自分事として捉えやすいでしょう。また、そうした課

題に取り組みながら視野を広げ、多様な選択肢の中から、自分が学びたい学問や、社会でやりたいことを見つけられるようになってほしいという思いもありました」

同プログラムの中軸を担うのが、異学年間の交流の機会である2学年合同での活動だ。まず、1年生は1月に、SDGsの目標の中から関心のあるものを1つ選択。同じ目標を選んだ生徒同士でペアを組み、目標に関連した探究テーマを設定する。そして、1年次に似た探究テーマを設定した2年生のペアと4人1組のグループになり、2年生・3年生に進級後の9月まで、週1回の協働学習を行う。その活動スタイルは、山梨先生が部活動をヒントに考案した。

「私が顧問を務める吹奏楽部では、上級生が下級生に手本を示す場面が多くあります。上級生はリーダーシップを発揮する中で、自分の演奏を振り返り、気づきを得るようです。また、上級生の姿に刺激を受け、練習により意欲的に取り組むようになる下級生が目立ちます。探究学習でも、異学年の生徒間の交流を通して学びを深めさせようと考えました」

2・3年次の夏季休業期間には、グループの4人それぞれが、探究テーマと密接にかかわる研究を行っている大学のオープンキャンパスに参加。9月には、そこで得た学びや気づきを一人ひとりがレポートにまとめる予定だ。

「同じテーマでも、多様な研究のあり方があることを学べるよう、異なる大学を訪問さ

せたいと考えています。生徒同士でレポートを読み合えば、参加していない大学の様子も分かり、大学選びの参考になるでしょう」（露木先生）

### 地域から求められる学校で あり続けるために

同委員会が推進してきた一連の取り組みにより、生徒は学習意欲を高めるとともに、やりたことに積極的に挑戦するようになった。

「何事にも主体的に向き合い、自分で定めたい目標の達成に向けて力を尽くすようになりました。本校では、最難関国立大の合格者が増加傾向にあります。これも、生徒が粘り強く学習に取り組んでいることの表れだと考えています」（古谷先生）

今後は、取り組みをさらに充実させていく。例えば、20年度の「探究プログラム」では、SDGsの目標と関連した研究に力を入れている大学教員を招き、生徒に探究方法などを個別にアドバイスしてもらう予定だ。

「いずれは、現在の指導改善を推進している教師が異動したり、本校が静岡県教育委員会の事業の指定校でなくなったりすることもあるでしょう。それでも指導改善を継続していくためには、教師間で課題意識を共有するとともに、保護者や外部機関との連携強化が欠かせません。今後も情報発信に力を入れていきたいと考えています」（小関校長）

\* 2 Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。